

311  
106

二十四孝詩選解說

禿氏祐祥



始





## 全相二十四孝詩選解説

古來孝道を重んじてゐた支那では、孝行を以て知られてゐる孝子二十四人を古記録中に求め、その事蹟を五言絶句の詩に詠じ、圖繪を加へてこれを刊行流布した。即ち元代の刊本「全相二十四孝詩選」がそれである。この書は室町時代に寫傳せられ、江戸時代には假名文の説明を添へた刊本が廣く行はれてゐた。初刊本に最も近い様式を保存してゐると推定される繪入本を複製するに際し、この書の由來竝に支那日本に流傳された次第をも記述して、この書が教訓書として幾い問如何に重きを置かれたかを明かにしたいと思ふ。



本書の原本 永らく西本願寺の寫字臺文庫に所藏せられ、現在は龍谷大學圖書館に保管されてゐる本書の古寫本は、繪のある分と繪のない分と二部あつて、この兩本は同一系統の寫傳ではあ



るが、兩者を比較すると、それたゞ特色をも備へてゐるので、兩本を共に複製することにしたのである。先づ初に輸入の分即ち甲本に就て述べることにしよう。最初の一葉右に、

新刊全相二十四孝詩選

延平尤溪郭居敬撰

の標題と作者とを掲げ、これに續いて大舜の題詩と事蹟とを叙し、上部に圖繪を收めてゐる。また第一葉左以下第十二葉左の陸續にいたるまで、これと同様に上欄に圖繪、下欄に本文を收めてゐる。第一行の人名、第二行第三行の題詩と、この三行は前後通じて文字の配列が同一であるが第四行以下の事蹟を述ぶる部分は長短の不同があるから、この部分に於ては行數も一定してゐない。この書が寫傳された時、別に異本があつて、これを参照したことは、最後の第十二葉の次に更に一葉を加へ、これに「二十四孝終」の尾題と伯俞の一項を收め、註記して「或本無三黃山谷有伯俞」と述べてゐるので、この事が推察されるのである。この伯俞の項にも上欄に圖繪があるから、何等かの理由で黃山谷と伯俞とを入換へたことがあつて、二種の刻本が併存したものと

推定される。用紙は薄い梶子色の紙に、僅かばかりの切箔を散じたのを採用してゐるが、全部に亘つて可なりの蟲損が見受けられ、銀箔も薄黒く變色してゐる。筆寫の年代は室町時代の中期と推定すべく、本文の筆力は幾分柔かであつて圖繪と同筆である點に於て何人も異論はあるまい。本文には句讀點も訓點も加へてゐない。

乙本は本文だけで、半葉八行と定め、題詩以外の記事は各行十四字と一定し、次第を逐うて書寫してゐるから、全部が十一葉で完了してゐる。而して記事の方が題詩より一字低く書寫されてゐるのは、甲本と同様であるが、一見して乙本の方が何となく體裁がよい。また甲本と異り全部に訓點を加へ、人名、地名には區別し易い様に朱引を加へ、句讀點も添へてゐる。訓點は本文の筆者自ら加へたものと考へられるが、朱點また同人の筆と考へることも可能である。本文を十一葉に書寫し終り、一行の空白を存して

二十四孝終 皆嘉靖廿五乙巳年刊

と記入してゐる。更に一葉を加へ、伯俞の分を寫してゐるのは、甲本と同様であるが、甲本の様



な註記がないから、この伯俞の分を附した理由は更に表現されてゐない次第である。

二十四孝と特に關係があるものとは思はれないが、甲本乙本を通じて、次に列擧する詩文が附録されてゐることも注意すべく、或はこの古寫本の傳來を知るのに何等かの手掛りとなるかと思はれるから、繁を厭はず記載することゝしよう。

一、八景詩 八首 宋玉潤作

玉潤作の瀟湘八景詩は二種あつて、この分は享保元年我國で刊行された八景詩歌の分と異つてゐる。

二、玉潤詩 四首

古木(梅)、枯木(柳)、薄暮(青楓)、萬里江山(外題山水)の七言絶句四首。

三、牧溪畫三幅の贊

漁夫、婦子の双幅は虚堂禪師贊。中尊布袋は簡翁贊。

四、子庭作石菖蒲の贊

五、虚堂禪師の詩一首

七言絶句、送二茂侍者二贈三日本照師一人と附記す。

以上の附録が兩本共に本文と同一筆で書寫されてゐる點を考へると、この兩本は何れもその據る所の原本が同一であると思はれるが、甲本が先に寫され、これから乙本が寫されたか、またその反對に乙本が先に寫されて、これから甲本が寫されたか、兩者何れであるかを決定することは困難である。試に兩本を對照し、本文だけで字句の相違を示すと、次の結果が得られる。

	(甲 本)	(乙 本)
孟宗	地上出筭數莖	地上筭數莖
閔損	欲遣後母	欲遣後母
老萊子	五色斑爛	五色爛爛
唐夫人	孝敬	愛敬



郭巨 再得

再有

庚黔婁 列縣

到縣

乙本の巻尾に本願の鼎印と光昭の方印が押されてゐることは、慶長元和の頃、西本願寺第十二代の法主であつた准如上人の手澤本であることを示すものであるが、その頃、甲本と共に他より入手されたものと思ふ。傍註の分を拾ひ出すと、瀟々に「瀟イ」、喪母に「死也又失也」、編欄に「色不純」、盛郷の郷に「室イ」、夜臺に「墓也」、阿香に「雷神也」、縁林に「賊ヲ云」の如きものを見受けるが、この傍註も後人が加へたものではなく、本文を書寫した人が加へて置いたものと思はれる。また甲本に伯愈とせる分は乙本では伯愈、伯瑜と二様に書寫されてゐる。甲本、乙本共に近年改装された際に幾分紙端が斷られたかと思ふが、現在は甲本が縦九寸八分、横七寸、乙本が縦九寸、横七寸となつてゐる。この複製本は殆んど原本大で僅に縦で三分餘縮まつてゐる。

**元代の初刊本** 本書の作者たる郭居敬に就て『續文獻通考』卷七十一に次の如く述べてゐる。

郭居敬尤溪人、性至孝、事親左右、承順得<sub>二</sub>其歡心<sub>一</sub>、嘗推<sub>二</sub>虞舜而下二十四人孝行之樂<sub>一</sub>、序而詩<sub>レ</sub>之名<sub>二</sub>二十四孝詩<sub>一</sub>以訓<sub>二</sub>童蒙<sub>一</sub>、

この記事は郭居敬が二十四孝詩の作者であり、これを世に弘めた人物であることを物語つてゐるが、これを刊行流布したのは郭居敬自身であつたか、また他の人がこれを開板したかは明かでない。初刊本の序跋でも傳へられてゐるとすればその事情も判然するのであるが、何れにしても、元代に於て既に刊行されたものと考へてよいと思ふ。長澤規矩也氏が『書誌學』昭和十六年二月號に記載された所に従ふと、元代の初刊本が先年上海の書店に現はれたとの事である。即ちその扉に「二十四孝奉親詩選」と二行に書し、その中央に「郭居敬作」、兩側に「二十四人行孝弟」「百千萬載振綱常」の文字を列ねてあつたと報告されてゐる。元代俗間に行はれた刊本にはかうした様式の書が少くなかつたことを考へると、元代の刻本と見るべきである。また本文は下欄に圖繪は上欄に收められ、巻頭には初行に「全相二十四孝詩選」、次行に「延平尤溪郭居敬選」と記入し、巻末に「全相二十四孝詩選畢」と載せてあつたといふから、この複製本と類似してゐる様



である。この書が元代に刊行されたのは一回だけであつたと断定すべき理由がないから、二回三回に亙つて刊行されたと推定すべき可能性があり、また明初にも再刊されたことがあつたと思はれる。乙本には嘉靖二十五年の刊記があること、また伯俞の加はつてゐる一本が存在したことなども、この事實を裏書きするものである。川瀬一馬氏は『書誌學』昭和十六年十二月號で『全相二十四孝詩註』と題する一本を紹介してゐるが、或は元代明初にかうした題號の刊本も或は行はれたことであらう。また時として圖繪を省略した刊本も行はれたことと思ふ。吾人が元代の初刊本に最も近いと考へてゐるこの繪入本も、或は嘉靖二十五年の刊本から寫傳されてゐるのかも知れない。圖繪の畫風を仔細に檢するならば、寛永十二年刊行の『三世相』と類似した點が多いことを發見するであらう。『三世相』は嘉靖十九年の刊本を翻刻したことの確證があるから、兩者の間に類似點のあることは、上記の推定を扶けることとなるのである。順序は次の如く配列されてゐる。

一、大舜 二、漢文帝 三、丁蘭 四、孟宗 五、閔損

六、曾參 七、王祥 八、老萊子 九、姜詩 一〇、黃山谷  
一一、唐夫人 一二、楊香 一三、董永 一四、黃香 一五、王真  
一六、郭巨 一七、朱壽昌 一八、劉子 一九、蔡順 二〇、庾黔婁  
二一、吳猛 二二、張孝張禮 二三、田真 二四、陸績

以上の各圖を通覽して特に注意されるのは背景は幾分單純であつて、丁蘭、孟宗、老萊子、王真、田真に於ては前記『三世相』にも見受けられる様に長袖を垂れ、禮讓の姿態を示してゐることが注意される。この事實より考へてこの種の圖繪は決して我國で構圖されたのではなく、元代の初刊本、または明代嘉靖年間の刻本から傳承されたことを如實に示すものである。

**本書の成立** 本書は『續文獻通考』に記されてゐる通り、元代の文人郭居敬の編次せるものであるとすれば、その資料を如何なる方面に求め如何なる構想の下に編次したかといふ事も考へて置く必要がある。支那に於ては各人が郷里を愛し、家族的結合の要諦として孝行を勧め、これを



人倫道德の基本と考へてゐたから、特に孝子として表彰される人物も少くはなかつた。また孝子の傳記を集成した『孝子傳』も頗る多く、現に知られてゐる分だけでも次の十二部がある。

- 一、孝子傳 漢劉向撰
- 二、孝子傳 晉蕭廣濟撰
- 三、孝子傳 晉陶潛撰
- 四、孝子傳 晉徐廣撰
- 五、孝子傳 宋王韶撰
- 六、孝子傳 口王詠撰
- 七、孝子傳 口周景式撰
- 八、孝子傳 宋師覺授撰
- 九、孝子傳 口宋躬撰
- 一〇、孝子傳 口虞盤佑撰
- 一一、孝子傳 宋鄭緯之撰
- 一二、孝子傳 口闕名撰

以上の中で完本として傳はつてゐるものは少く、引用文として諸家の記録に載せてゐるのが多いのであつて、劉向の分は古孝子傳として廣く知られてゐる。唐代李瀚の編次した『蒙求』にも孝子に關する分が若干載せてゐるが、二十四孝を選定する際に次の諸項は有力なる資料として參考されたに相違ない。

- (上) 子路負米、江革巨孝、曹參趣裝、陸績懷橘、孟宗寄鮓
  - (中) 郭巨將坑、董永自賣、王裒柏慘、閔損衣單
  - (下) 下蘭刻木、老萊斑衣、黃香扇枕、王祥守柩、蔡順分棹、姜詩躍鯉
- 時代に依つて區別する時は古に多く、唐代宋代に少いのが注意される。
- (周) 大舜、閔損、曾參、老萊子、刻子
  - (漢) 漢文帝、丁蘭、董永、郭巨、姜詩、黃香、孟宗、蔡順、張孝、田眞、陸績
  - (六朝) 王祥、楊香、王裒、庾黔婁、吳猛
  - (唐) 唐夫人
  - (宋) 朱壽昌、黃山谷

郭居敬が取上げた孝子の中で最も異色のあるのは刻子である。この人物は佛教の經卷に説かれてゐることであるから、云ふまでもなく、支那に現はれた孝子ではないのである。刻子は箇莫迦菩薩のことであつて、釋迦牟尼佛が前生に於て菩薩行を修した時の稱號である。『六度集經』卷



六、「西域記」卷二等にも記載せられ、西晋聖賢譯の「劓子經」一卷、同失譯の「菩薩劓子經」一卷またこの菩薩の修行を説いてゐる。この假想的人物を支那歴代の記録に載せてある孝子と同一視してこれを取上げたのは、誤つてこれを實在の人物と考へたからであらう。後人また劓子の事蹟を深く究むことなく、周代の人物と考へてゐる場合が多いのである。

本書の普及 本書が元代に出板された際に、通俗文學書として教訓書として輸入本として大衆の歡迎する所となり、重板再刻が各方面で行はれたであらうことは、容易に推察し得る所である。またこれと同時に、内容の改變も時として行はれたに相違ない。即ちその順序を變更したり、またその一部分を入換へたりしたことも當然の事實である。その一例として「分類二十四章孝行録」と題する一本を指摘することが出来る。本書は二十四人の孝子を分類配列し、その事蹟を記述した點で特に注意すべく、二人だけが入替はつてゐる。これに上記の初刊本を對照して示すことゝしよう。

(孝行録)	(初刊本)	(年代)	(備考)
孝帝類……孝感動天	1 大舜	周	
親嘗湯藥	2 漢文帝	漢	
孝賢類……齧指痛心	6 曾參	周	曾參趣裝(上)
單衣順母	5 閔損	周	閔損衣單(中)
爲親負米	仲由	周	子路負米(上)
孝子類……賣身葬父	13 董永	漢	董永自賣(中)
鹿乳奉親	18 劓子	周	
行傭供母	江革	漢	江革巨孝(上)
懷橘遺親	24 陸績	漢	陸績懷橘(上)
孝婦類……乳姑不怠	11 唐夫人	唐	
苦孝類……恣蚊飽血	21 吳猛	六朝	



臥水求鯉	7 王祥	六朝	王祥守柩(下)
爲母埋兒	16 郭巨	漢	郭巨將坑(中)
盜虎救親	12 楊香	六朝	
仕孝類……棄官尋母	17 朱壽昌	宋	
嘗羹憂心	20 庾黔婁	六朝	
順孝類……戲彩娛親	8 老萊子	周	老萊斑衣(下)
拾棋供親	19 蔡順	漢	蔡順分橘(下)
扇枕溫衾	14 黃香	漢	黃香扇枕(下)
涌泉躍鯉	9 姜詩	漢	姜詩躍鯉(下)
沒孝類……聞雷泣墓	15 王哀	六朝	王哀柏慘(中)
刻木事親	3 丁蘭	漢	丁蘭刻木(下)
病孝類……哭竹生笋	4 孟宗	六朝	孟宗寄鮓(上)

滌親溺器

10 黃山谷	宋
22 張孝	漢
23 田真	漢

二十四孝を選定したのは郭居敬であることは上に引用して置いた『續文獻通考』の記事が明かにこの事を證明してゐると思ふが、飯島忠夫氏は『孝經講話』の附録に二十四孝の事を掲げ、その選定者を朝鮮の權吉昌であるとするとする一異説を紹介してゐる。即ち元の至正六年に作られた『孝行録』の序文に「府院君吉昌權公嘗命工人畫二十四孝圖樣一即贊」とあるから、贊の作者は李齊賢であり、これを父の菊齋に上つたところ、菊齋は更に三十八人を補足したから、李齊賢はこの追加の分にも贊を作つたことを知るのである。前贊二十四孝の中には劉段、義婦、孝娥、劉明達、元覺、魯姑、鮑山、伯瑜の八人が加はつてゐる爲め、漢文帝、黃香、王哀、吳猛、庾黔婁、朱壽昌、唐夫人、黃山谷の八人が除かれてゐる。而してこの除かれた漢文帝以下の八人は後贊三十八人の中に加へられてゐるのである。而してこの『孝行録』と題する書は狩谷掖齋舊藏の一本



が傳へられ、大正十一年南葵文庫で「孝行録眞本」と題し、出版されたので始めて世に知られ、飯島忠夫氏は此書に基いて二十四孝の由來を世に紹介されたのである。明の張九韶編述の「群書拾唾」卷五に孝子二十四人として掲げてゐる分は、朝鮮本の「孝行録」に前贅とせる二十四人と類似してゐるから、兩者の間に何等かの關係があるものと思ふ。

上記の「分類二十四章孝行録」はこれに註解を加へ、吳興陳季常校閱と記入した一本が天和貞享の頃我國に翻刻されてゐる。また「増補評註日記故事」卷一に掲げてゐる二十四孝も同様の分類で配列されてゐるから、明代にこの種類の一本が行はれたことを知るのである。要するにこの「全相二十四孝詩選」は民間に行はれた通俗繪入本に過ぎないから、廣く流傳しつゝある間にしばしば改變せられ、初版本の體裁は次第に失はれたものと思はれる。近代に於ても支那に於てこの二十四孝の事柄は知られてゐるが、漸くにして七言の題詩が傳へられてゐるだけで、圖樣などに於て古格を守つてゐるものは見受けられない。

この書が我國に傳へられたのは鎌倉時代か吉野時代であることは、これ等の時代に宋元の版本

が少からず渡されてゐることから推察される。「童子教」に郭巨、姜詩、孟宗、王祥の四人を孝子の代表として他の舜子以下六人と共に記載してゐるのは二十四孝の流傳と關係あるものと考へられ、この「童子教」は永和三年の古寫本が存在することに依つて二十四孝關係の最古の記録と見るべきである。また文安元年作の「下學集」卷上（人名門）に関子壽（関損）の事蹟を掲げ、「職人盡歌合」卷下、四十七番、文者の歌に、

とくにつくさいはひなればびんしけん  
薄き衣は人もかさねじ

と述べてゐる點は二十四孝の民衆化を示すものである。また祇園祭の山鉾に孟宗山、郭巨山が存在することも同じく民衆化の事實を證するもので、特に孟宗山は應仁亂以前から錦小路烏丸の町内から出たことが「祇園社記」卷十五に記録されてゐる。五山の禪林に於ても二十四孝の事蹟が詩文の好題目となつたことは容易に推察される事柄であつて、「禪林五鳳集」卷五十八の孝純部はその一端を示すものである。即ち掲ぐる所の詩四十八首、作者は仁如、策彦、春澤、月舟、雪嶺



萬里、西胤、琴叔の八人である。  
 二十四孝の説話が畫題として各方面に取あげられたことも注意すべき事實であつて、繪卷物、襖繪、屏風繪に於てもしばしば見受けられたに相違ない。「季瓊日録」長祿二年七月十七日の條に「能阿彌持二十四孝之繪來、而有評議也」の一節が存在することを『考古畫譜』卷九に記してゐるが、恐らくは繪卷物に仕立てられた二十四孝の繪であつたであらう。徳富蘇峰氏の成實堂文庫に所藏されてゐる奈良繪の二十四孝はこの種の繪卷物から變化したものと思はれる。嵯峨本、御伽本として知られてゐる『二十四孝』もその内容は上記の奈良繪に類するものであることは云ふまでもない。襖繪の實例としては京都市の南禪寺に、また屏風繪は同じく京都市の本法寺にこれを傳へてゐる。室町時代の古寫本、江戸時代の刊本は少からざる數に達するであらうが、寫傳せられ、改刻せられつゝある間に古格が失はれ、初刊本の體裁はこれらの寫本刊本に於ては容易にこれを知ることが出来ないのである。この點に於てこのたび吾人が複製した古寫本は尊重すべき遺寶であると云はねばならぬ。

新刊全相二十四孝詩選

延平尤溪郭居敬撰

大舜(一)

隊々耕春象

紛々耘草禽

嗣堯登寶位

孝感動天心

大舜至孝、父頑、母瞍、弟象傲、舜耕於歷山、有象爲之耕、鳥爲之耘、其孝感如此、堯聞之、妻二女、讓以天下、

漢文帝(二)

仁孝臨天下

巍々冠百王

漢廷事賢母

湯藥必親嘗

前漢文帝高祖之子、母薄太后、帝奉養無怠、湯藥必親嘗、而後進母、乃爲仁孝之賢君也、



丁 蘭 (三)

刻木為父母

形容在日新

寄言諸子姪

聞早孝其親

丁蘭父母死，思慕骨肉，乃刻木為象，而事之。以報其本，其妻不敬，以針刺之，血出，蘭歸見之，弃妻，大泣不止，令人父母俱存者，可不敬乎。

孟 宗 (四)

淚滴朔風寒

瀟々竹數竿

須臾春笋出

天意報平安

孟宗字恭武，母年老病篤，冬月思笋食，宗往竹林中泣竹而告，天有頃地上出笋數莖，持歸作羹，供母食畢而病愈。

閔 損 (五)

閔氏有賢郎

何曾怨晚娘

尊前留母在

三子免風霜

閔損字子騫，早喪母，父娶後妻，生二子，母嫉損所生子，衣以綿絮，衣損以蘆花絮，冬日令損御車，體寒失軛，父察知之，欲遣後母，損啓父曰：母在一子寒，母去三子單，母聞之，悔改，遂成慈母。

曾 參 (六)

母指纒方齧

兒心痛不禁

負薪歸來晚

骨肉至情深

曾子名參，字恭與，其母一日有親客至，家貧無具，母齧其指，參探薪山中，忽心痛，即負薪以歸，跪母問其故，母乃云。



王祥(七)

繼母人間有，王祥天下無。  
至令河水上，一片臥冰模。

王祥魏時人，早喪母，繼母朱氏不慈，數譖之，由是失愛於父母，常欲食生魚，時天寒，冰凍，祥剖冰求之，冰忽自解，雙鯉躍出，持歸供母，每冰凍，天寒，有人形，臥冰上，今在肇慶府。

老萊子(八)

戲舞學嬌癡，春風動綵衣。  
雙親開口笑，喜色滿庭闈。

老萊子至孝，奉親，行年七十，身著五色綉綉之衣，為嬰兒，戲於親側，養極甘脆，言不稱老，為親常取食上堂，詐跌而僵，作小兒啼，以娛親。

姜詩(九)

舍側甘泉出，一朝雙鯉魚。  
子能知事母，婦更孝於姑。

姜詩事母至孝，奉順尤篤，母好飲江水，妻出六七里，沂流而汲，姑嗜魚膾，夫婦常力作，供膾呼隣，母共之，舍側忽有涌泉，味如江水，每且輒出雙鯉魚，以供二母之膳。

黃山谷(一〇)

貴顯聞天下，平生孝事親。  
汲泉涓溺器，婢妾豈無人。

黃山谷，宋朝人，時推為江西詩祖，元祐中為太史，性質至孝，奉母安，康郡君，每夕親為母滌溺器，未嘗頃刻不供子職。



唐夫人(一)

孝敬崔家婦  
此恩無以報

乳姑晨盥梳  
願得子孫如

崔山南家之盛鄉族罕比山南曾祖王母長孫夫人年高無齒祖母唐夫人事姑至孝每且櫛縱拜於階下即升堂乳其姑長孫夫人不粒食數年而康寧一旦疾病長幼咸集宣言無以報新婦恩願新婦有子有孫皆得如新婦愛敬則崔之門安不昌大乎

楊香(一)

深山逢白額  
父子俱無恙

努力搏腥風  
脫身饑口中

楊香其父爲虎曳去香搏虎遂免於害

董永(一)

葬父貸方兄  
織絹償債主

天姬陌上迎  
孝感盡知名

董永字延年後漢人家貧備力父死貸錢一萬而葬道遇一婦人求爲永妻俱詣主人家令織絹三匹一月而畢輒辭永曰我天上之織女聞君至孝天帝令我助君償債言訖凌空而去

黃香(一)

冬日溫衾煖  
兒童知子職

夏天扇枕涼  
千古一黃香

黃香字文強九歲而失母事父盡孝暑則扇其枕席寒則以身溫被太守劉護表而異



王哀(一五)

慈母怕聞雷

水魂宿夜臺

阿香時一震

到墓遙千廻

王哀字偉元，至孝。奉母平生畏雷，既死而葬，每遇雷震，即至墓曰：哀在此，勿懼。

郭巨(一六)

貧乏思供給

埋兒願母存

黃金天所賜

光彩照寒門

郭巨字文學，妻生一子，三歲，母常減食與之。巨謂妻曰：貧乏不能供給，共汝埋子，子可再有，母不可再得。妻泣而從之，遂掘坑三尺，得黃金一釜，上云天賜孝子郭巨，官不得奪，民不得取。

朱壽昌(一七)

七歲生離母

參商五十年

一朝相見面

喜氣動皇天

朱壽昌生七歲，父出其母，母子不相見者五十年。壽昌行四方求之，不已，與人言輒流涕。熙寧初，棄官入秦，與家人訣誓不見母，不復還。行次同州，得焉。劉氏年七十餘矣，東坡有詩美之。

刺子(一八)

老親思鹿乳

身掛褐毛衣

若不高聲叫

山中帶箭歸

刺子父母年老俱患雙目，思食鹿乳。刺子衣鹿皮入鹿群之中，以取鹿乳。獵者見欲射之，告訴乃免。



蔡順 (一九)

黑糶奉親闈 啼飢淚滿衣  
赤眉知孝順 牛米贈君歸

蔡順汝南人王莽末天下大荒順拾桑椹黑赤異器盛之赤眉賊見而問之曰黑者奉母赤者自食賊知其孝乃遺米二斗牛蹄一隻而去

庾黔婁 (二〇)

到縣未旬日 椿庭遭疾深  
願將身代死 北望啓憂心

庾黔婁南齊時人也為潯陽令到縣未旬日忽心驚流汗即奔官歸家父疾已二日醫云欲知瘥劇但嘗糞甜苦則為佳黔婁輒取嘗之味轉甜滑心愈憂苦至夕稽顙北辰求以身代

吳猛 (二一)

夏夜無帷帳 蚊多不敢揮  
恣渠膏血飽 免使入親闈

吳猛年八歲有孝行家貧無帷帳夏不驅蚊恐去己而齧其親也

張孝張禮 (二二)

偶值緣林兒 代烹云瘦肥  
人皆有兄弟 張氏古今稀

張孝張禮家貧兄弟二人禮養母拾柴於路遇賊將烹食之禮云乞回家供母早食却來就死孝聞自詣賊曰禮瘦不如孝肥願代弟命禮曰禮本許殺勿殺吾兄賊見二人孝義俱捨之



田 眞 (三三)

海底紫珊瑚 群芳摠不如  
春風花滿樹 兄弟復同居  
田眞田廣田慶 兄弟欲分財產 堂前紫荆一株 花葉茂盛 夜議研分  
爲三 曉即憔悴 眞乃嘆曰 樹本同株 聞分研 尙如此 人何不如也 兄  
弟由是不復分焉 其色再發

陸 績 (三四)

孝悌皆天性 人間六歲兒  
袖中懷綠橘 遺母報食飴  
陸績字公紀 年六歲於九江 見袁術 術出橘 績懷三枚 去拜墮地 術  
曰 陸郎作賓客而懷橘乎 績跪答曰 欲歸遺母 術大奇之  
二十四孝終 昔嘉靖廿五乙巳年刊

「或本無黃山谷有伯俞」

伯 俞

嚴母終朝責 輕々力不加  
應心頻泣淚 天命更還除  
韓伯俞至孝 時有過母杖之大泣 母曰 往者杖汝常悅受之 今者杖汝  
何得悲泣 俞對曰 往者得杖常痛 知母康健 今杖不痛 知母力衰 是以  
悲泣 所以悲傷而至於哭泣也

八 景

洞庭秋月 玉澗  
四面平湖月滿山 一阿螺髻鏡中看  
岳陽樓上聽長笛 訴盡崎嶇行路難



山市晴嵐

雨拖雪脚斂長沙

最好市橋官柳外

煙寺晚鐘

鐘送斜陽出暮山

山翁莫怪歸來晚

瀟湘夜雨

古渡沙平漲水痕

蘭枯蕙死無尋處

漁村夕照

一江晴日滿沙汀

簑笠未乾榔板靜

隱々殘虹帶晚霞

酒旗搖曳客思家

遙知煙寺隔前灣

欲待峰頭月上還

一篷寒雨滴黃昏

短些難招楚客魂

賣盡魚來酒半醒

一聲橫笛數峰青

遠浦歸帆

無邊利境入毫端

殘照未收漁火動

平沙落雁

點々隨群舊處栖

天寒水冷難成宿

江天暮雪

萬里江天萬里心

橋橫路斷馬蹄滑

帆落秋江隱暮嵐

老翁閑自說江南

蓼花蘆葉暗長堤

猶自依々怨別離

飄々花絮灑平林

更說藍關轉不禁

古木梅

瘦盡風煙四十圍

莫教淪落西湖去

玉澗

春光曾不到寒枝

羞被官梅御柳知



枯木

同

漚不乾叱不起  
今朝拈出與人看

三十年草窠裡  
攪抄春風何日已

薄暮 青韻

同

可期無定雨悠悠  
望斷暮雲殘照外

昏底黃沙日夜流  
青楓吹落海門秋

萬里江山 外題山水

玉澗

生業辛勤一釣竿  
老來活計無多子

幾經風雨犯波瀾  
轉覺蓑衣不耐寒

漁夫 畫牧溪贊堂

天水無波錦鱗自若

舉起絲綸負命者著

船子 同

黃葦叢中秋蟾影裏  
是非不自朱涇起

野水無波釣頭有餌

布袋 畫牧溪、贊簡翁、中尊也、以上三幅一對

大開笑口以手捫胸  
啞飛過我閣浮著爾儂  
全無些伎倆爭可在天宮

石菖蒲 子庭

寒溪之濱沙石之竇  
九節霜雪不槁置之幽齋永以為好  
產此靈苗蔚然而秀有美君子採持而歸根蟠

為吳翁居士作

木葉辭柯霜氣清  
東西南北無人處  
虎頭戴角出禪局  
急急歸來話此情

送茂侍者贈日本照師禪人 虛堂



終